

久保田 曉

北方探検の英傑

世現ハ九キモノナルヲ人々其理ヲウタガフ故ニニ
極星ノ高下ニツイテ其九キ道理ヲサトランハ固ト
羅訛ト云タトヘハ南海シマカタラノ北極出地一
度北ニ向テ日本へ来レバ極星三十六度ヲロシマヘ
行ハ五十度夜國ニイタレハ九十度極星入ノ頭上ニ
アリ是ヲスケレバ極星カヘツテ後ニ見ルマスマス
行ハ赤道ノ下ニイタル南極星出地ヲ見ベシ天ハ一
昼夜ニ九万里廻ル矢コリモハマシ其正中ニ在故ニ
海水モアフレカ天上地下ノ居所皆同陰陽ノ妙渾天
義ウタガフベカラヌ

○此國河蘭院ノ所製世ニ流布スル丁多シ其大小精
殊令圖全國異同アルニ似タレ但大抵皆同也○大東

近藤重蔵と

その息子



著者紹介

久保田暁一（くぼた ぎょういち）

1929年滋賀県に生まれる。

高校教師をへて平安女学院短大、中部女子短大に勤務。

現在、中部女子短大助教授・梅花女子大学講師。

日本ペンクラブ、日本文芸家協会、日本キリスト教文学会、日本近代文学会等に所属すると共に、教育文化誌『だるま通信』を主宰発行。

1984年第19回関西文学賞受賞。

主な著書

『青春の探究』『ある高校教師の歩み』（日本図書館協会選定図書）
『キリスト教と文学』『キリスト教文学の可能性』『愛と証しの文学』（日本図書館協会・全国学校図書館協会選定図書）『近代日本文学とキリスト者作家』創作『波濤』『親と子のきずな』などがある。

PHP文庫

北方探検の英傑

近藤重蔵とその息子

1991年2月15日 第1版第1刷

著者 久保田暁一

発行者 江口克彦

発行所 PHP研究所

東京本部 03-3239-6221

〒102 千代田区三番町3番地10

京都本部 075-681-4431

〒601 京都市南区西九条北ノ内町11

印刷所
製本所

図書印刷株式会社

© Gyouichi Kubota 1991 Printed in Japan

落丁・乱丁本は送料弊所負担にてお取り替えいたします。

ISBN4-569-56324-4

北方探検の英傑近藤重蔵とその息子

久保田暁一



PHP文庫

○ 本表紙図柄 || ロゼッタ・ストーン (大英博物館蔵)
○ 紋章 + 装幀基本デザイン || 上田晃郷

北方探検の英傑
近藤重蔵とその息子

目次

『八丈実記』							東蝦夷地探検行	雄飛の前夜
	慟 哭	父子流罪	鎗が崎事件	左 遷	書物奉行	探検の英傑		
224	198	162	129	95	68	53	25	7

悲願成就

252

帰島

288

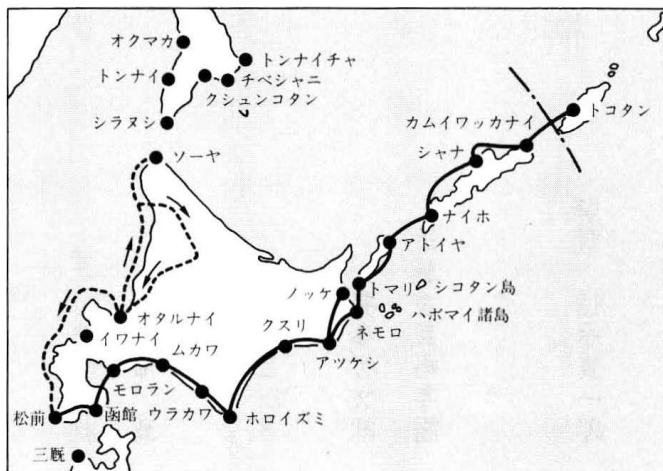
あとがき

主要参考文献

近藤重蔵略年譜

解説 徳永真一郎

重蔵の探検ルート



----- 近藤重蔵の探検路(推定)
 —— 近藤・最上(徳内)の探検路

〈第1次探検〉 寛政10年(1798)4月15日～寛政11年2月26日

江戸——松前——襟裳——厚岸——国後島——択捉島

〈第2次探検〉 寛政11年3月20日～同12年12月12日

江戸——松前——襟裳——厚岸——根室——国後・択捉島

〈第3次探検〉 享和元年(1801)2月24日～同年11月27日

東海岸から国後・択捉島へ

〈第4次探検〉 享和2年4月5日～同年12月15日

東蝦夷地へ

〈第5次探検〉 文化4年(1807)6月15日～同年12月8日

江戸——箱館——利尻島——宗谷——天塩川——石狩川奥地
 ——松前——江戸

雄飛の前夜

近藤重藏守重が湯島聖堂で行われた学問試験に合格したのは、寛政六年（二七九四）四月二十七日、数え年二十四歳の時であった。前年まで老中首座の職にあった松平定信が人材登用のために、幕臣かそれに準ずる者に受験資格を与え、経書、歴史書、策問、紀事文章、復文等の能力を吟味した。重藏はその年の二月に受験し、五科目共に最優秀の成績で合格したのである。受験者は三〇〇名に近かったが、合格したのは僅か数名に過ぎなかった。

〈学問心掛一段のこと、尚出精仕るべきこと〉

この賞辞を、城中焼火の間で若年寄堀田摂津守正敦から言い渡されたとき、重藏の六尺豊かな堂々とした全身は、感激と力に満ち溢れた。

その夜、駒込鶏声ケ窪の自宅で祝宴が開かれた。

「よかつたのう、重藏。これからがいよいよ楽しみじゃ。お前は幼少の時から、ただ者ではなかつたからのう」

父の右膳守知は顔をほころばせ、わが子をたのもし気に見た。

席には、守知と義兄弟の契りをおかしている深山要右衛門が招かれてきていたが、要右衛門

もわが意を得たように大きく頷いた。

「そうよのう。たのもしいお子を持たれて貴公は楽しみじゃ」

守知は、重蔵が二十歳になった時に先手与力の職をゆずって隠居したが、号を知新庵と称し、千家茶道に通じて門弟にも教え、また砲術にも秀れていた。しかし、幕制下の身分秩序のもとでは、先手与力という市中警護をする二〇〇俵の低い身分で守知は終わらざるをえなかった。が、自分が望んでもどうしようもできなかった栄達の夢を、わが子が果たしてくれるかもしれない、それが嬉しくてならないのだ。重蔵は三男であった。しかし、長男の藤次は、生来病弱だったので守知の弟のもとへ養子に出て医師を志し、次男は出家し、重蔵が守知の跡を継いだのである。

その重蔵について、守知が「幼少の時からただ者ではなかった」と言ったのは、親の鼻^{ひな}_めめでは決してなかった。

重蔵は幼少の時、円次郎と名付けられていたが、八歳頃にはすでに「孝経」をそらんじ、書物に深く親しみ、近隣の者から「神童」と呼ばれていた。そして、十七歳の時、重蔵は同志と共に「白山義学塾」を興し、武術、軍学、算術、四書五経、書道、歴史綱鑑、などを、貧しくて学ぶ道のとざされた子弟に教えた。その塾の教授者として、本多利明、塙保己都、屋代弘賢等の当代きつての知識人も名を連ね、重蔵は学主になっていた。諸大名に招かれて講義を行なったこともある。また、塾生の守るべき基本方針として、「白山郷修齋会約」（略称「白山郷約」）を作り、学問が枝葉末節に走って本道を忘れてはならず、道義を切磋して一郷を仁の里

とし、三代の隆を興す先達たるべきことを堂々と説いたりもした。

しかも重蔵は、ただ単に学問を好むだけの机上の若者ではなく、家督相続して先手与力になつてからは、江戸市中見廻御用にも精励し、その功によつて十人扶持の加増を受け、白銀を城中より賜わつている。

しかし重蔵は、たとえ上司であろうと、あるいは年長の者に対してであろうと、こうと思つたことを臆せず述べて憚らないところがあつた。重蔵が親交してゐた平山行蔵（字子龍・号兵原）が、昨寛政五年に江戸詰から甲府勤番に転任を命じられた時にも、その氣骨が発揮された。

平山行蔵は、重蔵と清水俊蔵とともに、後に「文化三蔵」と世人に呼ばれた武士であり、文武両道、特に剣道（心貫流）と兵学に秀れ、蝦夷地の防備にも深い関心を持ち、最上徳内とも親交してゐた。年齢は重蔵より十四歳年長であつた。

しかし、甲府にいた父が周囲のさん言によつて罪に陥され、行蔵が甲府に呼び戻されて行くようになった時、重蔵は熱意をこめて「送る序」と題して書信をしたため、三十七歳の行蔵にズバリと意見したのである。

「平山子龍今度甲陽に謫せられ候事、乃父の過、姦邪の讒より事起り候といへども、子龍亦罪なきにしもあらず候。……」

こう書き始めて、子龍が孝悌の道を忘れて親をかえりみなかつたこと、たとえ左遷させられる憂身にあつても天下国家のことを忘れるべきでないこと、人とは異なるうとせず、中庸の道

を重んずべきこと、甲府に到つたならば、日々静座讀書し、君命をかしこみ、令法を畏れ、ただただ二親を養うことに努め、黙々として日々を過ごして一、二年に及び、孝悌道徳に秀れるに至るならば、天眷てんけん（天の情け）が自らあるに違いないという意味のことをしたため、最後に、「子龍取る事あらば是を取れ、取る事なくば焼失して可也」と結んだ。

そうした真直な一面を持つ重蔵であつたから、重蔵を高く評価する者がいると同時に、煙たがる同輩や上司たちも少なくなつたのである。

重蔵は父と要右衛門が喜ぶ姿を見つめた時、よし、やるぞという気魄が一層こみ上げてきた。

母の美濃は、給仕をしながら終始微笑み、三人が語るのに耳を傾けていた。美濃は、もと備前福山藩の侍医藤田隆本の娘であつた。

「これからいかなる道が開かれてくるか存じませぬが、重蔵、精一杯に励んで参ります」
守知と要右衛門は頷き、要右衛門は重蔵の杯になみなみと酒をついだ。

重蔵は一気に飲みほした。

「見事な飲みっぷりでござるな。それにしても、学問試験の制度を設けられた松平定信様が退かれたとは。松平様は改革を断行して奢侈と賄賂政治を断たれたが、厳し過ぎて不人氣だつたから。水清ければ魚棲まずというところか。その上、蝦夷地の問題でかなり頭を痛められていたようじゃ。して、これから世の中はどう変つて行くかのう」

要右衛門が言ったように、田沼意次おきつぐの跡を継いで老中首座になった定信は、田沼時代に奢侈と賄賂の横行した政治を刷新し、商品経済重視の政策にかえて農業重視の政策をとり、また朱子学を正学にして、湯島聖堂の昌平坂学問所を拡げて役人たちに学ばせるなどして綱紀を正した。更に、田沼時代に進められた蝦夷地開発のための調査団の派遣政策も否定し、調査に派遣された幕臣青島俊蔵を、蝦夷地調査に協力したという罪で捕えて獄死させ、また、『三国通覽 凶説』や『海国兵談』を著わして国防の必要性を唱えた林子平を、人心をまどわす者として処罰した。

しかし、定信が老中を失脚する前年の寛政四年（一七九二）九月に、ロシアの使節アダム・ラックスマンが通商を求めて根室に來航した。その時、定信は、石川左近將監忠房と村上大学義禮を松前に派遣してラックスマンと談合させ、鎖国を理由にして通商を断わるとともに、通商外交のことはすべて長崎で扱う旨の信書を与えて帰国させた。しかし、定信失脚後も、蝦夷地の事態は刻々と急を告げてきていた。要右衛門はそのことを指して言ったのである。

重蔵は、父と要右衛門が定信の失脚や世情を話題にし始めた時、機会があつたら未だ見知らぬ北の果ての蝦夷地に行つてみたいと思つた。そう思つた時、妙に血が騒いだ。

「拙者は父や要右衛門殿とは違つて若いのだ、今後どのような世界が開かれてくるのか……」
重蔵は二人と杯を交わしながら、未知の世界に思いを馳せていた。

明けて翌寛政七年六月五日、重蔵は長崎奉行手付を命じられた。拔擢である。そして、新た

に長崎奉行に任ぜられた中川飛驒守忠英の下で働くことになった。

重蔵は、希望に胸をふくらませながら赴任の準備を進めた。重蔵に対する周囲の期待は大きかった。

佐藤一斎もその一人である。一斎は、湯島聖堂の大学頭であった林述斎が最も信頼した高弟であり、重蔵とは親交が深く、かつて重蔵が「白山義学塾」を興した時、「白山義学記」を書いて励まし、激賞した。そして、このたびの重蔵の長崎赴任を非常に喜び、わざわざ「送近藤重蔵之長崎序」を書いて、励ました。その書信の中で、「友人近藤君重蔵、学博而才優、夙有志於經世之学、而動以古豪傑自準者也」（友人近藤君重蔵、学博にして才優れ、夙に經世の学に志し、而して動もすれば古豪傑をもつて自ら準ずる者なり）と書き、重蔵の才能と氣質を讃えた。

重蔵は、一斎の書信を読んで内から力がみなぎってくるのを覚えるとともに、自分を評価してくれる知己の友を持ったことが嬉しかった。重蔵は一斎の書信を大切にしまい、長崎の地へ持っていくことにした。

八月初旬、重蔵は、諸国を巡りながら陸路長崎の地に向かったが、途中、諸国の地理や風情を詳細に記録することを怠らなかつた。そして、半月後に赴任地に到着した。

長崎の地は、鎖国下の日本で唯一の開港を認められている長崎港とオランダ商館のある出島を有する街だけに、江戸では見られない異国情緒を漂わせていた。

重蔵は到着したその日、長崎港に向き、肥前藩の船団とオランダ船一隻が沖合に碇泊しているのを見て、胸の高鳴りを覚えた。オランダ船は日本船に比べると、はるかに近代式的装備に

優れているように見え、扇型をした出島は、重蔵の心を惹きつけ、未知の国へと誘うようであった。

へよーし、わしはここで仕事に精励し、できる限り外国の状況を探ってみるぞ

重蔵はそう呟き、両手をひろげて深く息を吸い込み、陽光を浴びて光る紺青の海を見つめた。

翌朝、奉行所に出仕した重蔵は、中川忠英に初対面した。

忠英は、面長の引き締まった端正な顔に笑みを浮かべ、

「近藤重蔵、よくきた。そちに期待しておる。心して目安方を勤めるがよいぞ」

目安方というのは、往来する清国船・オランダ船を検察したり、長崎にやってくる外人の動静を探ったりする役目である。重蔵は、忠英をたのもしい奉行と感じつつ、顔を紅潮させて平伏した。

この時から、忠英と重蔵は深く結ばれて行くことになった。

重蔵が赴任して半月後の九月下旬のある日、一隻のオランダ船が港を出て、近くの高鉾島たかぼこの沖に停船していた。明日の出帆の前に長崎奉行所の検察を受けるためである。

重蔵は同僚の役人・通詞（通訳）と共に、夕刻、小舟でオランダ船に向かった。が、風のために海が荒れ、なかなか舟は進まず危険でもあった。やむなく神埼前の繫場つなぎばで一時舟を止め、波が静まるのを待つことにした。しかし、風は吹きやまず、波は衰えを見せなかった。夕闇が

訪れていた。

その時、オランダ本船から「バツテイラ」と呼ばれている小舟がやってきた。長さ三間余り、広さ九尺ばかりのオランダの伝馬船である。バツテイラの帆は三角形をなし、その端が相接していて、巧みに風をしのぎながら進んでくる。しかも、舵は小さい上に船底の端舵と相接していてよく分水し、船は安定していた。

「うーん」

重蔵は思わずうなつた。

バツテイラは接岸すると、乗組員の一人が使者となり、

「風波の中、お勤め御苦労さまです。この伝馬船は転覆することはありませんから、どうぞ乗りかえて本船までお出てください」

と、通詞を通して言った。

重蔵たちは、その勧めに従ってバツテイラに乗りかえ、本船まで行った。オランダ本船は、波のうねりを受けて大きく揺れていた。

船長が、重蔵たちをもてなすために酒菓を用意した。が、職務中に饗応を受けることは厳禁されていたので、それを無視し、重蔵たちは検視の作業を続けた。

検視の結果、異常は見当らなかつた。が、船の揺れに耐えながらの検視の作業は、一同をひどく疲れさせた。その時、一同の疲れを晴らすかのように、暗い海上から、管弦を打ち鳴らす音が突然聞こえてきた。見ると、出島の方からやってきた一隻のバツテイラが鳴らしているの

である。

そのバツテイラは本船に向かつてきた。そして、大波にもまれながらも巧みに本船に横付けし、数人のオランダ人が乗船してきた。彼等は重蔵たちにお辞儀した後、通詞を介して急な用談で来た旨を伝えた。そして、船長と半刻ほど用談し、その後、重蔵たち一行に続いて下船した。

重蔵たちを乗せたバツテイラが、岸に向かつて漕ぎだすと、突然、耳をつんざくばかりに空砲が鳴り響いた。重蔵たちへの挨拶のために鳴らされたのだ。また、オランダ人たちを乗せたバツテイラが鳴らす管弦の音が、再び風に乗って聞こえてきた。

風はようやく弱まり、黒雲の間から月光が射してきていた。そして海上は、管弦の音と本船および港から洩れる光とゆったりとうねる波とが交錯して、長崎の港ならではの奇観を呈していた。

重蔵は、バツテイラの船首に腕を組んで座り、

へ井の中の蛙になつてはならぬ。このバツテイラに象徴されているように、世界の技術は進んでいるのだ。鎖国日本を取り巻く世界の情勢を知らねばならぬ。……

と、心の中で何度も呟いていた。

重蔵は、身をもって体験したバツテイラの威力を、「バツテイラの記」と題して一文にまとめ上げた。